

ICPA2019 参加報告

広域科学専攻 博士課程 2年 遠藤希美 (中澤公孝研究室)

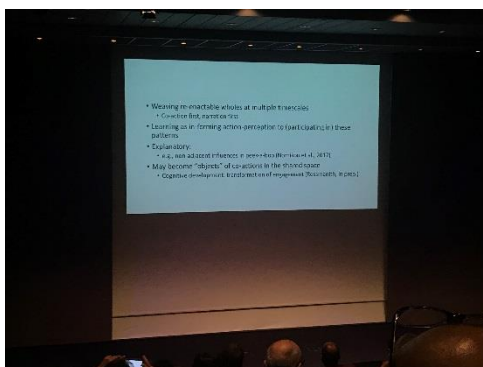
「博士・修士課程学生のための国際研究集会渡航助成」の支援をうけ、International Conference On Perception And Action (ICPA2019)に参加した。本学会は知覚と行為・運動の相互作用に関する研究を対象とした大規模な国際会議であり、毎年7月ごろに開催されている。今年には2019年7月3日から6日にオランダ・フローニンゲンにて開催された。学会プログラムによると約200件の演題が集まっており、参加者もそれに応じた人数であったと考えられる。参加者の研究分野は心理学とスポーツ科学が中心であったが、「知覚と行為」に関連した様々な他の学問分野（建築・哲学・生物学など）もあった。このことから、非常に学際的な印象を受けた。

私は”Influence of amplitude regarding finger force on loudness discrimination acuity of self-generated sound”というタイトルでポスター発表を行った。ポスターは会期中常に掲示されており、1日約2時間のポスターセッションが3日間行われた。

私は、自分自身が生成する音（自己生成音）がどのように知覚されるか、というテーマで研究している。今回は、音生成時の運動の強さの変化が自己生成音の知覚にどのように影響を及ぼすかを調べた結果、音生成時の力発揮が強くなるほど音の知覚の精度が低下する現象を発見したことについて発表した。この現象は、ヒトが運動の変化に応じて聴知覚の精度を調整するようなシステムを持っていることを示唆している。

今回のポスター発表では、詳細な説明やディスカッションを行ったのは十数回とさほど多くはなかった。しかし、私の研究分野に近い研究者や先行研究としてこれまで参考にしてきた海外の研究者から非常に興味を持ってもらい、私が考えにも及ばなかった新たな示唆をいただいたため、有意義であった。他の参加者の発表やコーヒープレイク等でも、国内外の様々な分野の研究者から新たな知見を得て情報交換することができた。特に、本学会で知り合った先生方と帰国後も情報交換が続いており、今後の研究にも役立つと確信している。

本学からこの渡航助成を得て国際会議に参加する機会を与えていただいたことに感謝し、研究成果で報いることができるよう、今後の研究に励んでいきたい。



写真：シンポジウムの様子。多くの意見が飛び交っていた。